

一期生に会う

天水の丘に短大が創立されてから、今年は記念すべき二十年目に当たる。わずか一棟の学舎で出発した短大であったが、今は五つの教室棟に講堂・体育館・音楽棟などが建ち並び、丘の上に偉容を見せている。卒業生も遂に今年で一万人を越える。四十三年、二二六名の一期の卒業生が出た頃を思えば隔世の感がある。

先日、その一期生数人と出会った。そして楽しいひとときを過ごすことができた。彼女らは、一期生としての自覚をもち、伝統を築いてきたという自負があり、いまなお、母校の発展に意を用いてくれていて頼もしい。

彼女達の学生時代は、草創の時で施設も設備も不十分ではあったが、そんな中でも、実は、社会に生きる英知を身につけていたのである。それにつけても、私は、彼女達と歓談する中で、「物はなくても、庭にリンゴ箱を持ち出して子どもと腰かけ、星を眺めながら人生や社会のことを語れる英知のあるお母さんになりなさい」とおっしゃっていた国信玉三先生のお話しを思い出していた。かつて、学校に泊って天体観測をしていた時代があったが、その観測に加わった生徒達は、誰しも神秘の星の世界に驚嘆したのであった。だが、それにもまして、国信先生の宇宙や人生についてのお話しには、正しく生きる英知を授けられ感動したものであった。

今、創立二十年を迎えようとするとき、同窓会では、短大草創期の者が中心になり、後輩に呼びかけて短大部会を発足さすという。不十分な施設や設備にも負けず英知を身につけて社会に飛び立った彼女達であれば、必ずやその発足にこぎ着けることであろう。心から期待している。